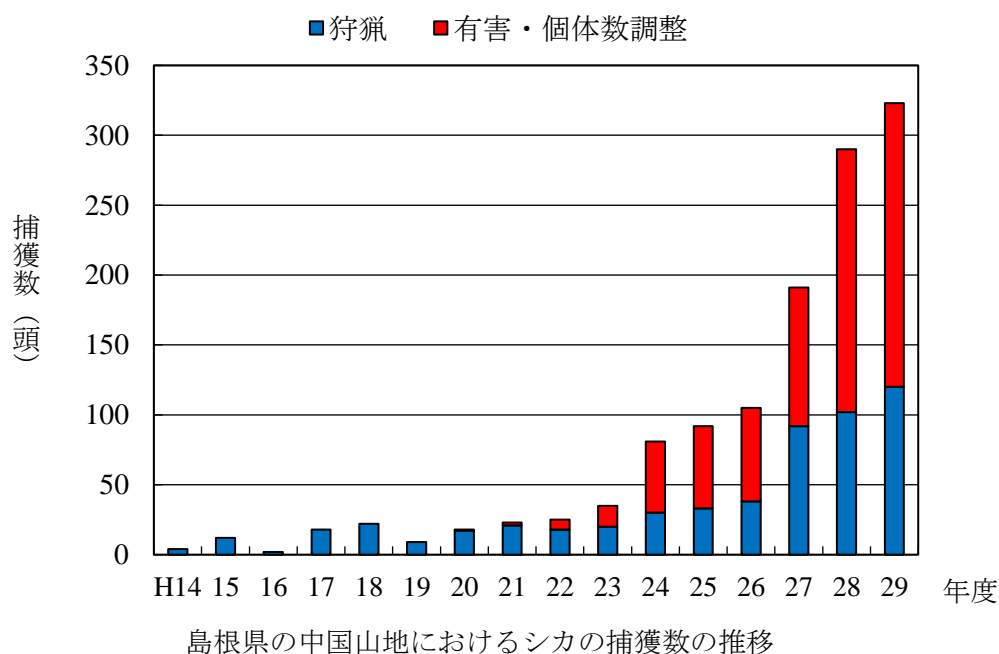


中国山地におけるニホンジカの生息、被害実態と今後の対策

中山間地域研究センター

1. ニホンジカの生息実態

本県の中国山地に生息するニホンジカは、乱獲などによって明治時代にはほぼ絶滅しましたが、近年は生息を再び認めるようになりました。これらのシカは遺伝子分析によって、おもに広島県から生息域を拡げて来たものであることがわかりました。広島県では、広島市北部の白木山系に残ったシカが増加して生息域を拡げており、およそ 53,000 頭が生息すると推定されています。本県の中国山地での捕獲数は、平成 29 年度には狩猟と有害捕獲によって 323 頭と次第に増加しています。なかでも、広島県に隣接する邑南町で 135 頭、飯南町で 59 頭、美郷町で 33 頭、奥出雲町で 27 頭および浜田市で 22 頭と捕獲数は多く、メスや子も認められました。また、捕獲場所は中国山地のすべての市町に及んでいます。なお、平成 28 年度末の中国山地での生息数は、階層ベイズモデルを用いた推定法によって約 2,000 頭（推定値の中央値）、また 1 年間の増加数は約 540 頭（同）と推定されました。



2. ニホンジカによる被害実態

シカによる農作物への被害は、邑南町でムギ、ダイコン、イネ苗などへの食害を認めています。軽度の被害に留まっています。一方、造林木への被害は、平成 28 年には美郷町の 30 年生ヒノキ 2 林分に角こすり害と樹皮食害の発生を認めました。このうち、1 林分の被害が集中している山頂部のやや平坦な区域（85 本）では、被害発生を 26 本（31%）に認めました。うち、樹皮食害木は、数年前から当年の夏期までに加害されてい



美郷町の30年生ヒノキ（左）と邑南町の4年生ヒノキ（右）に発生した樹皮食害

ました。地際部から剥皮されるのが特徴の樹皮食害は、おもな被害が角こすり害である島根半島ではほとんど発生を認めていない被害型ですが、広島県では発生が認められています。また、平成29年には邑南町の4年生ヒノキ林（144本）において、樹皮食害の発生を122本（85%）に認めました。このうち、28本は全周を剥皮されて枯死していました。この食害は、当年の春期に加害されたと判断しました。なお、他県で多発して問題となっている幼齢造林木の枝葉食害は、これまでに発生を認めていません。

3. 今後の対策

本県の中国山地では、おもに広島県からの分布拡大によって、シカが増えつつあります。また、シカによる農作物や造林木への被害も少しずつですが、発生し始めています。シカによる被害は、生息密度に比例して増加することが知られていることから、シカが増えすぎないように捕獲をしていくことが重要です。平成28年度の推定増加数である540頭に比べて、捕獲数は290頭と少ないことから、今後は捕獲数を増やしていく必要があります。そのためには、捕獲者の確保や技術の向上などが不可欠です。また、広島県や県境の市町、林業事業者などが連携したシカ対策の取り組みも必要です。